

NVC Monthly



同好会ニュース

寝屋川映像同好会会報

第75号(201510)

発行 竹田幸男



寝屋川市映像協会と映像北大阪との合同例会

寝屋川市映像協会では、守口市を拠点に活動されていて、協力関係にある映像北大阪との合同例会を行いました。9月12日(土)13時、守口市中央公民館4階で開催、今回は「音」をテーマに、映像北大阪さんが招請した岡崎先生の「音」と「著作権」についての講演があり、次いで例会としての作品映写を行いました。会場には北大阪、寝屋川以外の参加者も多く、総勢30数名が会場にあふれ大盛況でした。終わって近くの店で懇親会。こちらも大盛況の内に映像談義に花が咲きました。

例会の窓

平成27年9月例会

日 時：平成27年9月9日（水）

13：30

場 所：産業振興センター5F 会議室（大）

出席者：新井 小笠原 佐伯 竹下

竹田 谷 田淵（50音順・敬称略）

欠席者2名

例会次第

1. 報告・連絡・協議事項

(1) 会報筆者 佐伯さん

(2) 今年の大阪アマチュア映像祭出品作品

・11/1 竹下作品を出品。皆さん参加して応援を。

(3) 市民文化祭作品

・今日9月例会で一応締め切り。間に合わない人は月末まで。

・市民映像作品発表会は11/1（日・祝）9：30総合センター集合

10：30より映写

(4) 9月12日（土）映像北大阪との合同例会

・13：00守口市中央公民館4F

・寝屋川市駅 12：30発急行乗車

・出席：新井さん、谷さん、佐伯さん、竹田さん

2. 協議事項

(1) 第10回 寝屋川映像フェスティバル出品作品の検討

(2) 松愛会寝屋川支部40周年記念行事への対応

・記念行事と同好会展示（28年1月30日（土））

・会員作品展（28年1月8日（金）～11日（土））

会場は音を出せない、対策は？

・一人5作品タイトル、時間などの説明付き作品名を竹田さんにメールする。

・来月の例会までに同好会展示用（活動PR用）の静止画写真を集める。

3. 映写・研究発表

会員持参作品の映写

(1) 新井さん 田んぼアートを東京在住の方がドローンで撮影されたものを持参された。今話題のドローン撮影の写りに注目。

(2) 竹田さん 「九州への旅」 9分4秒

- ・ 40年前の8ミリ映像 VHS DVDに変換
- ・ 息子が中学の修学旅行の4日間の日程を8ミリ撮影したものを編集。教えた撮影方法を忠実に実行した点(駅・観光ポイントに着いたら看板を撮り、人を写すときは前に回って撮る等)点を、皆さんに参考として見て頂きたかった。1本3分のフィルム4本を有効に使って九州への旅をまとめている。

(3) 小笠原さん「宇治・伏見そぞろ歩き」 14分

- ・ 改修なった平等院を中心とした宇治散策から伏見へ移り、また改修前の平等院へ戻っています。田舎の人への紹介が目的のようで、ちょっと盛りだくさんになってしまいました。バックの音楽の傾向の違う宇治と伏見のつながりがもう一つ。宇治は宇治、伏見は伏見で別に作られては。宇治平等院の古い状態と改修後とを対比して編集するののも一つの方法かと思います。撮影会で一緒だったので、懐かしかった、との声もありました。

(4) 谷さん 「金剛山に行こう」 6分20秒

- ・ 撮影者の金剛山登山の思い出の集成作のようです。ナレーションは、少し説明的で、映像の良さを応援できていません。次回は気持ちを入れて作り直してみてください。

(5) 竹下さん 「称名の滝」 3分

- ・ 滝には圧倒的な迫力がありましたが滝の音がナレーションに重なり、すこし聞き取りにくかったようです。ナレーションの部分は現地音を充分絞った方がいいようです。滝の名前の由来の説明に止まらず最後にご自身の思いが入ればよかったと思います。

(6) 竹田さん 「あいつ」 4分59秒

- ・ このたび東京アマチュア映像祭、チャレンジ賞を受賞。原作は5分30秒で、規定の5分以内にするために、原作のイメージを損なわないように編集した。

4 . 各会員の最近の活動状況・情報交換・当面する問題点等

5 . 来月の開催日 10 / 14 (水)





敬老の日に思う

佐伯節子

いま67歳。まだ若いつもりだがなぜかよく電車で席を譲られる。

友人たちはあまり席を譲られたことはないという。立ってくれた人には遠慮なく「ありがとう」と座ることにしている。せっかく立ったのに座ることを固辞している人を見ると、譲った方が気まずいのではないのと思ってしまう。良いことをするにも勇気がいるのよ。しかし先日私が気まずい思いをした出来事があった。

いつになく混んでいる電車に乗った時、次の駅で座れた友人が、少し離れたところに立っていた、彼女より年配のKさんに席を譲ろうと立ちかけたので何気なく「あなたより若い人いっぱいいるから・・・」と言ってしまった。小声で言ったつもりなのに、隣に座っていた若い女性がやあら立ち上がって私に「どうぞ」と言う。

このときはさすがに「いやすぐ降りるから」と断ったけど彼女も意地で(?)「私もすぐですから」仕方なく座ったけどほんと気まずかったわ～。言葉には気を付けなくては。

話は変わるが、先月、木津川計さんの講演を聞く機会があった。テーマは「『大往生かポックリ死か』～生きがいのこれから」。NHKラジオで聞く彼の軽妙な語り口が好きだったので参加してみたのだ。

期待を裏切らず、笑わせながらも考えさせられる内容だった。

大往生の条件・・・大往生できるたった一つの条件は心がけを良くすること。難しい。

- 1・苦しむことのない安らかな死・・・七転八倒ではない 煙がスーッと消えるような。
- 2・男85歳以上・女90歳以上・・・死亡適齢期 一定の年齢を超えていること。
- 3・悼まれる死・・・惜しまれる死であること。
- 4・寝たっきり1年・・・周囲がへとへとになる リミットは1年。
- 5・身近な人に看取られる・・・場所は選ばない 8割はスタッフの揃う病院での死を望む。

しかし、ポックリ死を望む人は、寝たきり1年でも長いと思っている。

『ポックリ逝くための7つの習慣』婦人公論を見よとのこと。

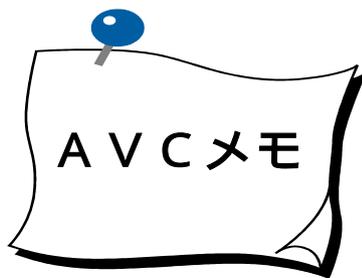
生きがいのある人生の条件

- 1・健康・・・車いす生活でも健康な人はいる。
- 2・経済的ゆとり・・・例えば孫に3000円渡せる余裕。
- 3・時間的ゆとり・・・忙しいという字は心を失くすと書く。
- 4・人間的社会的つながり
- 5・家族の支え・・・無縁社会 32000人の孤独死 思いやりという情感
- 6・張りのある日常・・・趣味・学習・スポーツ・ボランティア

年を取らない方法 = ときめきを忘れない。

週に1回はデパートに 月に一回封切り映画を見る 孫・幼児と仲良くなる。

笑って話を聞きながら、映像の先輩たちのことを考えていた。
皆さん「生きがいのある人生の条件」を備えた素敵な人生の大先輩でもあるのだなと。
団塊世代ももう少し頑張ろうっと。



針孔写真機・カメラのレンズと 人間の目、など・・・

竹田幸男

いままで、焦点深度、とか被写界深度という言葉が出てきました。こういう言葉は、カメラにレンズを使っているために出てきた言葉です。レンズという物の性質から、必然的に出てきた言葉だと言えそうです。では、レンズのいないカメラはあるのか、というと、あるのです。それが針孔（穴）写真機です。

こういう情景を想像してみましょう。田舎の廃屋に足を踏み入れる。雨戸を締めきって部屋は真っ暗。どこかに釘孔か、節穴か、小さい穴が1つ。

その穴から一筋の光が差し込む。すると床、壁に外の風景が映っている・・・。
これが自然天然の針孔（穴）写真機です。

余談ですが、一応、針孔・針穴、と2つの単語を並べましたが、世間には両方の書き方があるようです。では、孔と穴はどう違うかというと、孔とは貫通したものを指し、穴は貫通していない、底があるものを指すのだそうです。だから「壁に孔を開ける」は、向こうが見えるようになった場合であり、「庭に穴を掘る」は穴の底には土があることとなります。地球の裏側まで掘れるわけがないので「庭に孔を掘る」は間違っています。

余談はさておき、針孔写真機の構造は、たとえば6面体の1面にすりガラスを張り、この面に対向する面の中央に小さな孔（針孔）をあけたものです。この孔を明るい外界に向けるとすりガラスに外界の景色が逆さに投影します。原理的にこのすりガラスの前にフィルムや乾板（聞いたことがないかもしれませんが）を置けば写真の撮影が出来ます。孔の大きさにもよりますが、レンズを使ったカメラのように被写界深度という言葉はなく、近いところから無限大の距離まで、はっきりと写ると言われています。

交換レンズに「針孔レンズ」を出したメーカーがあるという記事も見たことがあります。拡張された画像表現の世界を開くツールだと思います。

人間の目は1枚のレンズを使ったカメラのようですが、実に精巧なカメラです。ガラスやプラスチックのレンズを使ったカメラでは1枚レンズはあり得ません。1枚のレンズでは赤色の光と紫色の光は1点に集まらないので画像に虹色がかかって見えます。そのために必ず2枚以上のレンズを使って違う色の光が一点に集まるようにしています。何か脳の中で違う色が一点に集まる仕組みが出来ているのでしょうか。もっと不思議なのは、カメラでは、ワイドレンズなどでは四角い物が四角でなく端がまがって写ります。人間の目ではこのようなことが起こらず、四角いビルは四角に見えます。きっと脳の中で、うまく補正しているのでしょう。

人間の目は毛様筋という筋肉でレンズの働きをする水晶体の曲率を変えて遠くの物、近くの物にピントが合う仕組みですが、高齢になると水晶体も固くなり、この働きが弱くなって近くの物が見えにくくなり、老眼鏡が必要になります。また視野も暗く、色の見え方も悪くなるので、手術をすることになります。近眼というのもこの調節機能が遠くの物にピントが合わせられないことで起こるものです。

白内障の手術は、濁った水晶体を取り除き、代わりにプラスチックの眼内レンズを入れます。手術により交換したプラスチックの模擬水晶体は固いので毛様筋が収縮しても厚さが変えられず、ピント調節はできません。しかし、どういう訳か交換前の本当の水晶体よりもプラスチックの疑似水晶体の方が近くのものも、よく見えることがあるのです。特に明るいところでは。

これは不思議に思い、よく考えてみると、濁った元の水晶体は光を通しにくくなり、網膜に達する光が減り、暗く見えます。すると十分な光を取り入れるため、必然的に写真機の絞りに相当する虹彩が開き、瞳孔が大きくなって、すなわち被写界深度が浅くなって、ぼける範囲が広がるとピントの合っていない箇所は見えにくくなります。人工の疑似水晶体は透明度が高く、網膜に強い光を送るので、自動的に虹彩が小さくなり（つまり絞りが絞られ、被写界深度が深くなって）はっきり見える範囲が広がるので、眼鏡がなくても近くのものが見えるのであろうと一人で納得しています。